

「音楽の隠し味」



プロフィール 白川優希

4才よりピアノをはじめ。横浜市立南高等学校普通科卒業。桐朋学園大学音楽学部ピアノ科卒業。これまでに井上節子、川島伸達各氏に師事。阪急交通社「たびコト塾」有料音楽講座にて講師兼演奏。戸塚区民文化センターさくらプラザ広報誌 SAKURA にて連載「音楽の隠し味」執筆。

■コンサート出演

- ・戸塚区民文化センター さくらプラザ主催「開館5周年記念ワンコインリサイタル」
- ・戸塚区民文化センター さくらプラザ主催「名曲サロン Vol.21 ホール特別公演 弦楽アンサンブル」
- ・鶴見区民文化センター サルビアホール主催「水曜音楽会 #49 春に聴くピアノの調べ」
に出演。好評を博した。

■メディア

- ・NHK BS プレミアム 特別ドラマ「黒蜥蜴～BLACK LIZARD」ピアノ演奏。(ピアノ演技指導・吹き替え・監修)
- ・テレビ朝日系列「はじめまして、愛しています。」ピアノ監修。(ピアノ演技指導・吹き替え)
- ・テレビ朝日系列「『警部補・碓氷弘一シリーズ』～殺しのエチュード～」ピアノ監修。(ピアノ演技指導・吹き替え)
- ・テレビ朝日系列「警部補・碓氷弘一～マインド～」ピアノ演奏。(ピアノ演技指導・吹き替え)
- ・フジテレビ系列『世にも奇妙な物語「シンクロシティ」』ピアノ協力(自身出演・演奏)。
- ・日本テレビ系列「金曜ロードショー『さよならデュッシー』」ピアノ協力。(ピアノ演技指導・吹き替え)

■ラジオ出演

- ・エフエムとつか『Evening station』『今こそクラシック!』コーナー

■コンクール

- ・第25回厚木青少年音楽コンクール最優秀賞。
 - ・第26回かながわ音楽コンクール入選。
 - ・第35回全国町田音楽コンクール特選。自身の企画で戸塚区民文化センターや泉区民文化センターにて「オペラ紙芝居」を開催。他、戸塚さくらプラザ主催のイベントに多数出演。
- また、楽譜サイトにて J-POP ピアノアレンジ楽譜を販売。あざみ野「うかい亭」レギュラーピアニスト。小学校にゲストティーチャーとして招かれる他、帝国ホテル、シェラトン都ホテル等結婚式場や葬儀場、レストラン(国分寺 龍栄)演奏など幅広く活動している。



Yuki Shirakawa

『クラシック音楽を広めたい。』

現代では残念ながらクラシック音楽を自ら進んで聴く事が少なくなっています。小難しく自由感想も言えないような堅いイメージをお持ちの方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この本は、読者様のクラシック音楽への"はじめの一歩"を後押しすることを目的としています。

皆さんが良く耳にするクラシック音楽とは、1650年から1950年くらいまでの西洋音楽の事を指しますが、何百年も前に生まれた音楽を今、日本で演奏出来ると考えるとすごい事だと思いませんか？歴史あるものの中で唯一、音楽だけが忠実に当時の空間の再現ができて、誰もが楽しむ事の出来る娯楽なのです。

「音楽の隠し味」は、戸塚区民センターさくらプラザで隔月発行している情報誌 "SAKURA"2019年7・8月号から始まった私の連載です。作曲家の意外な一面を垣間見る事によって、彼らの作品がもっと面白く、味わい深くなる話を厳選しました。

ベートーヴェンの交響曲第5番「運命」第一楽章は、あの有名なジャジャジャジャーン！という曲です。「運命はこうやって扉を叩く！」という作曲された、というエピソードが広く知られていますが、実はその話にはねつ造疑惑があります。

主な疑惑の理由は二つあります。一つは、このエピソードはファンが証言したものだからねつ造されているのではないかと、ということです。当時ベートーヴェンにはシンドラーという熱狂的なファンがいました。どうしてもベートーヴェンの側にいたいからと無償で秘書をする程、彼に強い憧れを持っていたのです。憧れの人の格好悪い部分は自然と忘れてくなるものですが、シンドラーも例外ではなく、耳の聴こえないベートーヴェンとの筆談帳を一部破棄したり改ざんした形跡がありました。破棄された部分には作曲家の弱音や格好良くない部分がかかれていたのではないかと推測されています。よって、彼が言い伝えたエピソードは全体的にあまり信用されていません。作曲家を崇めるシンドラーがいたからこそベートーヴェンを神格化することが出来たのは確かですが、証言が本当かどうかは作曲家本人にしか分からないのです。

そして、「ジャジャジャジャーン」というメロディは交響曲第五番を作曲する以前から、彼自身が気に入って様々な作品の中で使っていました。第五番を作曲する以前に作られたバイオリンやピアノ作品の中には、実際に運命のリズムが潜んでいます。「扉を叩く」というと、いかにも突然閃いて楽譜に書き下ろしたかのような言いまわしですが、以前から使われていたとなるとベートーヴェンのリズムが既に胸の内において、交響曲を作曲するまであためてきたと言えます。扉を叩かれて衝動的に作った曲ではなく、長いこと時間をかけて作られたものだったのです。以上の、シンドラーの言い伝えが必ずしも信用出来ない点と、運命を表すリズムは以前から使用していたという二点を考えると「運命はこうやって扉を叩く！」といったエピソードは信憑性が薄いものだという事が分かりますね。

では、ベートーヴェンのこの作品のどこが素晴らしいのでしょうか。素晴らしい部分は沢山ありますが、1つあげるとすると「ジャジャジャジャーン」というメロディだけでとても大きな曲を作る事に成功したという所です。

この曲は、ほとんどが短い"運命のリズム"だけで出来ています。楽曲には激しさや切迫感がありますが、ただ単に苦しみ一色ではありません。中間に希望の光のような明るい部分が織り込まれていますが、その明るい部分には常に冒頭のリズムを所々に散りばめられていて、光の影に"運命(のリズム)"が潜んでいる事を表現しているのです。彼はそれまでの時代では衝動的な程、少ない素材だけを使って構成を練り、土台を安定させ柱を組み立て、素晴らしい建築物を完成させました。このように、作品一つ取ってみてもベートーヴェンの曲はかなり精密に作り込まれているからこそ現代でも多くの人々に愛されているのです。

さて、ここまで読んでくださった方の中にはベートーヴェン交響曲第五番「運命」第一楽章を聴いてみたくなった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この本を通して少しでも多くの方にクラシック音楽を聴く機会を提供させていただいたら幸いです。

 目次

まえがき・・・3

モーツァルトの隠し味「コンスタンツェ」・・・6

ベートーヴェンの隠し味「運命」・・・7

シューベルトの隠し味「怒り」・・・8

シューマンの隠し味「痛めた指」・・・9

ショパンの隠し味「生活環境」・・・10

チャイコフスキーの隠し味「ロシア・ウクライナ民謡」・・・11

ブラームスの隠し味(前編)「厳しいレッスン」・・・12

ブラームスの隠し味(後編)「古い音楽」・・・13

ドビュッシーの隠し味(前編)「コンクール歴」・・・14

ドビュッシーの隠し味(後編)「ペレアスとメリザンド」・・・15

あとがき / 年譜・・・16

参考文献・・・17



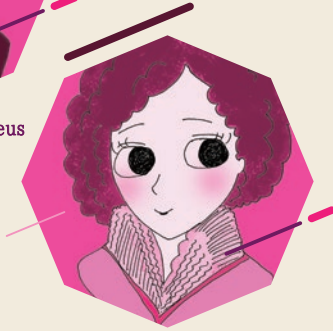
「音楽の隠し味」



モーツァルトの隠し味「コンスタンツェ」



Mozart, Wolfgang Amadeus



Constanze Mozart

モーツァルトは幼い頃から神童としてヨーロッパ各地で演奏し、また名曲も数多く生み出してきました。そんな天才音楽家の妻コンスタンツェが今回の隠し味です。

二人の出会いは、モーツァルトの下宿先でした。『彼女は美人ではないけれど小さな黒い目と常識のある所が魅力的だった』とモーツァルトは語っており、その後結婚に至ります。しかし、コンスタンツェは後世ソクラテスの妻、トルストイの妻に並び「世界三大悪妻」と言われています。一体なぜでしょうか？主な理由は3つあります。

- ①家計の管理が出来ない
- ②無知無学、才能の欠如
- ③浮気性

それぞれ詳しくみてみましょう。

①家計の管理

モーツァルトはフリーランスの音楽家でしたが、金遣いが荒く、稼げない時でも節約をしませんでした。コンスタンツェはそんな夫を律することをせず、自身も身体の具合が悪いと言って湯治旅行をしていたため、このように言われています。派手なパーティーを開くことを止めない妻としても悪く言われていますが、パーティーは音楽家にとってパトロンやコネクションを探す職探しの場でもあったのです。

②無知無学、才能の欠如

コンスタンツェは頭が悪く才能がない、と言われていますが、それはどちらも誤りです。まず前者について、一説にはまともに綴りも書けなかったとされていますが、母国語(ドイツ語)以外にも、フランス語の読み書きが出来たことが、彼女の手紙や記録に残されています。また、後者についても、彼女自身が歌手としてモーツァルトの書いた曲でソプラノソロを務める程の腕前でした。音楽家の妻だからといって、素晴らしい歌手である必要はあるのでしょうか。後世彼女の歌を聴いていない人々がコンスタンツェに対して「才能が無い」とは言えないのです。

③浮気性

これは、婚約時にモーツァルトがコンスタンツェに宛てた

手紙に由来します。それは次のような内容でした。『なぜ君は僕の前で、パーティーの罰ゲームで見ず知らずの男に自分のふくらはぎを測らせた、ということは何の恥じらいもなく喋ったのだろう』

これが彼女の軽薄さの象徴とされてしまったのです。コンスタンツェが浮気をしていたという証拠は今のところ出ていません。

さて、3つの理由をみてきましたが、これで「悪妻」というのは少々言い過ぎかもしれません。良い妻だったとは言えないけれど、②に関してはむしろ好印象です。では、反対にどのような妻であれば、「良妻」と言われるのでしょうか。

その代表的例が、音楽家シューマンの妻クララです。ピアニストだった彼女は、夫の作品を生涯演奏し、世間にピアノ曲を紹介し続けました。クララについて語られることから良妻の条件をまとめると、このようになります。

- ・非常に優れた音楽の才能がある
- ・才能を夫の為に捧げ尽くす
- ・夫の死後は自らの才能で夫の名声を高める

つまり、天才音楽家の妻は夫に尽くすだけでなく、並外れた才能があって初めて「良妻」になるのです。

確かに、コンスタンツェはクララのように「天才音楽家の妻」としてふさわしい「良妻」ではありませんでした。そのため、対比されて「悪妻」と言われてしまうのでしょうか。ただ、妻に求められる条件が高いこと自体が、逆説的にモーツァルトの音楽家としての偉大さを際立たせる「隠し味」になっているのだと思います。

最後に、モーツァルトがコンスタンツェに宛てた別の手紙を紹介しましょう。

『最愛の妻へ！

- 一、身体に気をつけ、春の外気に油断しないこと。
- 一、一人で外を出歩かないこと。
- 出来たら全然出歩かないこと。
- 一、僕の愛情を堅く信じていること。』

モーツァルトにとってはコンスタンツェこそが一番の「良妻」なのかもしれません。

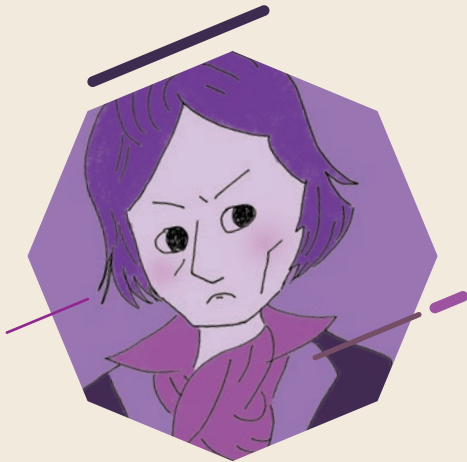
🎵 おすすめの一曲

モーツァルト / ピアノソナタ 第11番 イ長調 K331(300i)
「トルコ行進曲付き」

モーツァルトのピアノソナタの中で最も有名で、少しの雑味もないキラキラした作品です。第1楽章は変奏曲という形式で作られています。変奏曲とは、一つの素材を使って何個も違う味の料理をつくるような曲の形式のことをいいますが、当時第1楽章に変奏曲を置くことは異例だった為、周囲を驚かせたそうです。そして、あの「トルコ行進曲」は、このピアノソナタの第3楽章にあたります。『mozart K331』で検索するとピアノ音源が幾つか見つかるので、是非聞いてみてくださいね。



ベートーヴェンの隠し味「運命」



Beethoven, Ludwig Van

ベートーヴェンは、音楽史の分岐点とも言える程、多くの音楽的な革命を起こした作曲家です。彼は、後世の作曲家にとって超えられない壁となってしまいくらい、壮大な曲の数々を残しました。ベートーヴェン作曲交響曲第5番ハ短調「運命」もその一つです。

まず、この第一章冒頭部分、皆さん馴染みの「ジャジャジャジャー」というフレーズが登場しますが、当時、中心となるメロディ(今でいう「サビ」)がこれほどシンプルな曲はありませんでした。しかも、この短いフレーズだけを使いながら、様々なアレンジを用いて1つの大きな曲に仕上げていることはとても凄いことだったのです。シンプルなものを複雑に組み合わせることで、曲を作り上げた彼は、音楽界に衝撃を与えました。

また、そもそも交響曲とは会議や食事のBGMとして作られる、いわば「軽い」音楽でした。ほとんどが王侯貴族の為に作曲されていて、今のように重々しく厳格なものではなかったのです。しかし、ベートーヴェンは始めから曲作りに対する意識が高かった為に、交響曲といえども熟考を重ねて9つの素晴らしい楽曲を創作しました。

彼は、幼い頃から勉強熱心でした。下積み時代には昔の技法を学ぶ為に作曲の練習を500曲近くこなしたそうです。下積みを終えて作曲家として独立してからも、常に五線譜と筆記用具を持ち歩き、アイディアが浮かんだ時はすかさずメモを取るほど。そして、この曲には「対旋律」という昔の難しい技法が多く使われていて、それがドッシリとした重みと迫力を生み出しています。こうして作り上げられた「運命」は、交響曲というジャンルそのものの地位を向上させる作品の一つとなったのです。

隠し味はそれだけではありません。丁度「運命」が作曲された頃、ベートーヴェンは耳の異変に気づき、少しずつ耳が遠くなっていることに絶望を感じていました。この曲にもその絶望感が反映されていると言われています。

ベートーヴェンの死因や耳の病気については数多くの研究がされており、最近では「弱い音や高い音が聴こえにくくなる「耳硬化症(じこうかしょう)」という病気だったのではないかと」言われています。耳の内部が少しずつ硬くなってしまいうので、耳が詰まっているような感覚と、めまい、そして70%の患者には耳鳴りが伴う病気でした。

ベートーヴェンは、音楽家のライバル達に耳が聞こえないということを悟られないようにするため、家に籠って更に作曲に没頭するようになります。ライバル達に病気のことを知られると業界から蹴落とされると思っていたのです。実際に、音楽界で活躍している彼を疎ましく思う文化人も少なくありませんでした。

さて、音楽にストイックなベートーヴェンですが、一時期「運命」の作曲から離れています。理由は意外なものでした。何と、好きな人が出来たからです。ちなみに、恋愛をしている間は別の曲を生み出しています。前述の通り絶望の色が濃い「運命」は、恋人を想う優しい気持ちの時に手をつけられなかったということでしょう。彼がいかにこの交響曲第5番「運命」と真摯に向き合っていたかがわかるエピソードだと思います。

以上のような背景を知った上で聴いてみると、有名な曲もまた違った観点で分かりやすく楽しめるようになるのではないのでしょうか。

おすすめの一曲

ベートーヴェン / 交響曲第5番 ハ短調「運命」作品67

この曲は第一章から第四章までで1曲とする交響曲です。全ての楽章に「ジャジャジャジャー」というフレーズが様々なアレンジを加えられて登場し、全体の統一感を出しています。第一章では絶望感や苦しさも感じられますが、第四章では勝利や喜びのような明るさに移り変わります。この1曲を通して彼の信条である「苦悩の末に歓喜がある」という前向きなメッセージが含まれているのです。『beethoven symphony 5』で検索すると様々な音源が出て来るので是非全楽章通して聴いてみてください。指揮者によって速さや音の響きが違うので聴き比べながらお好みの演奏を探す事もおすすめの楽しみ方です。



シューベルトの隠し味「怒り」



Schubert, Franz

シューベルトは 19 世紀に活躍したオーストリアの作曲家で、「歌曲王」として現在も讃えられています。美しく覚えやすいメロディと曲中の場面転換がスムーズであることが、作品の特徴です。今回はそんな彼の「怒り」が隠し味です。

何故シューベルトが「歌曲王」と呼ばれているのかというと、わずか 31 年の生涯で約 600 曲もの歌曲を生み出した事からそう名付けられています。更に、その質も素晴らしいものでした。

それまで歌曲というジャンルは、作曲家が気軽に作るもので、誰でも歌えるようなものが大半でした。しかし彼は、歌詞につけられた微妙な感情の変化も音楽で表現しようとします。その結果、歌曲を音楽的な芸術作品として仕立て上げました。

代表曲として歌曲「魔王」D328 がありますが、今も中学生音楽の授業で教材として使用されています。衝撃的なラストにこの曲を覚えている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。語り、父、子、魔王を 1 人 4 役で歌い分けるこの曲は、怯える子を父がなだめる様子や、魔王が黄泉の国へ誘う甘い囁きが印象的です。ピアノ伴奏もかなり難易度が高く、作曲した本人でさえ「これを弾くのがこんなに難しくさえなければ、僕もこの歌が楽しめるのに」と言って簡略化して弾くほどでした。それだけ歌曲にこだわりを持って作っていたシューベルトですが、歌曲王としての名声が上がるにつれて、ある怒りが湧き上がります。それは、「僕は歌曲だけではない！」ということです。全ての音楽に細やかな気遣いをして曲を作り上げていた彼は、歌曲王、すなわち歌曲だけの作曲家というレッテルを貼られることに我慢なりませんでした。

彼の性格について友人達は口を揃えて「穏やかで謙虚」といい、生涯怒った事はたった 3 回のみでした。その中で彼のプライドが見受けられる出来事をご紹介します。

彼がある程度有名になってから参加した飲み会の席にて、オーケストラ団員数名が「何か僕達にも曲を作ってよ」と気軽に

言った時のことです。無名時代には目もくれなかった連中が、有名になった途端に曲をねだる等と作曲家を軽んじている態度に非常に腹を立てて「僕はフランツ・シューベルトだ！ただの歌曲作曲家じゃない、芸術家なんだ！君達は芸術家のつもりか！？君達には理解出来ない領域で美しいものを作った男だ！」と珍しくきつく怒りました。

アルコールが入っていたとはいえ普段温厚な彼が怒ったということは、周りをととても驚かせたそうです。翌朝、心配した彼の友人が家を訪ねると、眼鏡をかけたまま脱ぎ捨ててあった服に囲まれた作曲家は「怒った事を反省はしているが、あの小僧達にはあれで良いんだよ。そのうちに何か作曲してあげようとは思っているけどさ ... 」と呟いたと伝えられています。

どんな編成でも、曲の一つ一つにプライドをかけて作っていたことがよく分かるエピソードで、実際にシューベルトのピアノ曲や室内楽曲、交響曲は今も高い評価を受けています。シューベルトの「怒り」は作品の隠し味となっているのではないのでしょうか。

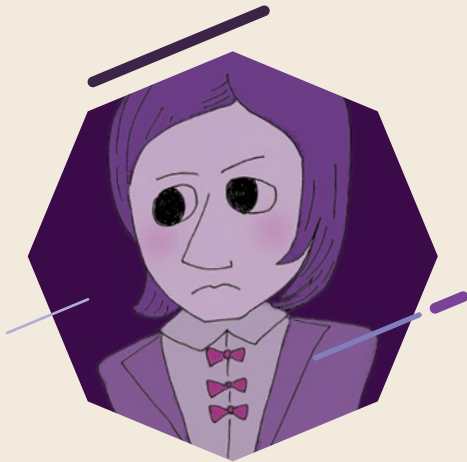
おすすめの一曲

シューベルト / 交響曲『ザ・グレート』D944 ハ長調

歌曲王として名高いシューベルトですが、本人が申し立てていたように交響曲も非常に高い評価を得ています。28 歳の時に作曲されたこの曲は、荘厳さに加えて彼特有のメロディを「歌う」表現が加わった為、世界中で認められ今もよく演奏されています。2 本のホルンのみではじまる交響曲は当時珍しく、観客を魅了しました。全楽章で 1 時間程と長大のため「天国的な長さ」と言われています。『schubert symphony great』で検索するといくつかの音源が見つかるので是非聞いてみてくださいね。



シューマンの隠し味「痛めた指」



Schumann, Robert

幻想的な作風で知られ、多くの人々を魅了しているシューマンですが、元々は作曲家ではなくピアニストを目指していました。

シューマンは7歳でピアノをはじめ、どんどん上達して18歳の時に名ピアノ講師ヴィーク氏に師事します。大学は嫌々ながらも法学部に進み勉学に励みますが、音楽への情熱を断ち切れず、大学を辞めてピアノに専念することになるのです。そんなシューマンの「痛めた指」が今回の隠し味です。

なぜシューマンは指を痛めたのでしょうか？

その原因について、様々な議論が交わされています。長らく、「1832年、彼が22歳の時に指を強くする目的で考案した練習用器具によって右手の中指と薬指を痛めた」と考えられていました。しかし現代においては次の2点から堅い無音ピアノでの練習が有力視されています。

①「練習用器具を使用して右手の中指と薬指を痛めた」という証言が誰を指しているのか分からないこと。

シューマンを教えていた名ピアノ講師ヴィーク氏が著書『ピアノと歌』の中で「有名なある生徒が練習用器具を考案し、使用したため右手の中指と薬指が傷んでしまった」と言及したことから、シューマンの指の痛みの原因としてよく知られていました。しかし、ヴィークは数多くのピアニストを輩出しており、当時ピアノを弾いていて指を痛める事は珍しいことでは無かった為、「有名なある生徒」がシューマンという証拠はありません。

②妻クララが「夫は堅い無音ピアノで練習して右手の人差し指を傷めた」と述べたこと。妻クララは、「夫は練習用器具は使っておらず、堅い無音ピアノで練習したため右手の人差し指を傷めた」とはっきり述べました。ですが、その時彼女は70歳で、13歳の時の思い出を話しているということと、今まで痛めていたと考えられていた指は中指と薬指であってクララのいう人差し指ではなかったのが不確かな情報とされていました。

ですが、1969年にドイツの学者が偶然シューマンと軍事令官の間に交わされた書物を発見します。その書物には、手の疾患によりライフルの引き金を引くことが出来ないために兵役が免除されていることが記されていました。ライフルは通常ならば人差し指をよく使うため、長い年月を経てシューマンの痛めた指は人差し指と中指であったことが分かったのです。妻クララの「人差し指を痛めていた」という証言は間違っていないませんでした。

ヴィークには多数の生徒がいた②妻クララの証言と軍事令官との書物にて痛んだ指が人差し指であることが一致しているということから、シューマンが何故指を痛めたのかという論点について、「練習用器具を使用したからではなく無音ピアノで練習していた」説が有力とされています。

恐らく、シューマンは夜中でもピアノが練習できるように無音ピアノを使っていたのでしょ。ただ、皮肉なことに、それほどまでの音楽への情熱が、彼のピアニスト人生を奪ってしまったのです。彼自身、指の痛みに気づきとても落ち込んだようで、「両手が自由に使えたらどんなに良かったことだろう」と、その時彼が感じた不安や焦りを綴った手紙は何通も残されています。治療もありとあらゆる方法を試しましたが良くはなりません。そして、ついに彼は指の治療を諦め、作曲に専念するのです。

彼はピアノを思うように弾けなくなってしまいましたが、この出来事がなければ今も愛されているような素晴らしい作品は生まれていなかったかもしれません。シューマンの「痛めた指」はピアノに対する彼の強い想いの表れとして、作品への「隠し味」になっているのではないのでしょうか。

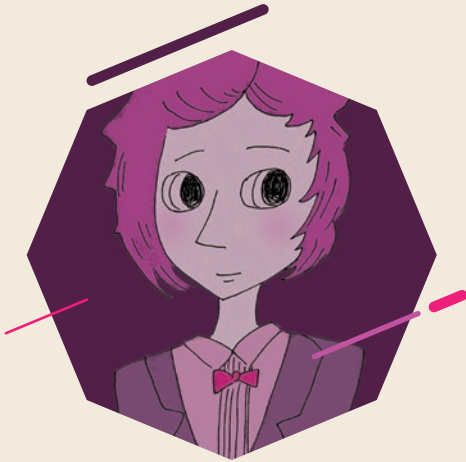
🎹 おすすめの一曲

シューマン / ピアノ五重奏曲 変ホ長調 Op.44

この曲はピアノ・ヴァイオリン 2名・ヴィオラ・チェロの5名で演奏します。当時ピアノを前面に出す五重奏はあまりありませんでしたが、シューマンはピアノに対して特別な想いがあった為、ピアノを中心に据えた作品に仕上げました。各楽器のバランスが絶妙で、高い作曲技法が使われていることからシューマンの作品の中でも特に人気のある曲です。『schumann op44』で検索するといくつか音源が出てくるので是非聴いてみてくださいね。



ショパンの隠し味「生活環境」



Chopin, Frederic

ショパンはピアノ曲に特化したポーランド出身の作曲家です。彼の作品は、今でも世界中の人々を魅了していて、あまりにも美しいメロディから「ピアノの詩人」と呼ばれています。完璧主義な彼は、曲が完成するまで部屋の中を歩きまわり、ペンをダメにするほど何度も書き直していました。どこにも欠点のない完全な美を目指したのです。彼のこだわりは音楽だけではありません。日常にも完全な美しさを求めていました。今回はそんなショパンの「生活環境」が隠し味です。

こんなエピソードがあります。彼が29歳の時、フランスのパリに新しい住まいを探していました。そこで、物件探しとインテリアコーディネートを、パリに住んでいた親友のユリヤン・フォンタナに依頼していたのですが、その時理想とする住まいの条件がすごいものでした。「適当な客間と食堂、かなり大きなキッチン、寝室3つに召使いの部屋2つと地下室。寄木細工の床（もちろん新しいデザインで良質なものを）。部屋は中庭に面して庭が見えるように。日当たりは絶対南向きで。立地は落ち着いていて静かで近所に鍛冶屋がないこと」『都心7LDK以上日当たり良好で庭付きグランドピアノ可能物件』とは、なんて贅沢な条件なのでしょうが... というのも、彼は直前まで住んでいたスペインの家について「丸天井は埃だらけ、机は簡易ベッドの横にあり小さく薄汚れている。このような環境で作曲する気になれるはずがない」と愚痴をこぼしています。作曲をする上で綺麗な住みやすい環境を重視していたからです。

そして、彼の友人ユリヤンはこの難題に見事答え、「9区トロンシェ通り5番地」に希望のアパルトマンを見つけます。ショパンは「君は非常に貴重な人だ！最良で最高に完璧です。」と大喜びしたといます。彼の美意識を象徴するパリの家は、現在チョコレートショップやブーツ専門店の並ぶ洒落たブティック街になっています。

ショパンのこだわりは立地や間取りに留まらず、インテリアに対しても美意識を炸裂させます。「壁紙は前に僕が使って

いたような、キジバト色（ベージュがかかった明るい灰色）で光沢のあるものにしてください。艶があり細く濃い緑色のひだで縁取ったもの。玄関は何か違う色にしてください。」

また、色へのこだわりも強く持っており、「僕は真珠色が好きなんだ。けばけばしくも平凡でもないからね。ありきたりなものよりサッパリした、落ち着いた清潔なものが良い。」と発言しています。そして、ショパンは部屋の中に必ず生花を飾りたがりました。美しいものが常に視界に映るようにしたかったのです。

ちなみに、ショパンがインテリアや環境にこだわった「9区トロンシェ通り5番地」は前述の通り今は見ることが出来ませんが、パリから車で3時間ほどのペリー地方に「ノアンの館」という彼がよく訪れ、全作品中3分の2が作られたとされる住居があります。ノアンの館は、現在ショパン博物館になっています。彼が過ごした部屋や当時の様子が再現されており、彼の美的な好みを鑑賞することが出来るそうです。

以上のことから、洗練、上品、優雅を求める美意識は音楽だけでなく、生活を送り作曲を行う環境にも現れていたことが分かります。生活環境で美の追求はショパンの美しいメロディーへの隠し味となっているのではないのでしょうか。

おすすめの一曲

ショパン / 練習曲 第3番 ホ長調 Op.10-3 「別れの曲」

彼が最も気に入っていた曲で、「自分の人生の中でこんなに美しいメロディーは書いたことがない！」と言ったという逸話があります。この曲は、メロディーを真珠が綺麗に並ぶようになるべく滑らかに繋げて演奏する事を目的とした練習曲です。ただ指を速く動かすだけではなく、芸術的な観点からみても練習曲として成立するように作曲されています。「chopin Op10-3」で検索すると様々な録音が出てきますが、私はアシュケナーズ (Ashkenazy) とポリーニ (pollini) の録音をよく聴いていました。弾く人によって解釈が分かれ、同じ曲でも全く違って聴こえるので是非試してみてくださいね。



チャイコフスキーの隠し味「ロシア・ウクライナ民謡」



Tchaikovsky, Pytr Il'ich

チャイコフスキーは出身国ロシアの国民性を保ちつつも西
欧音楽の伝統や形式を取り入れた作曲家で、バレエ「くるみ
割り人形」など親しみやすい作品を多く残しています。今回
はそんな彼の「ロシア・ウクライナ民謡」が隠し味です。

彼ははじめから「音楽家」という職業ではありませんでした。
当時のロシアでは音楽家だけで食べていくことが非常に難し
く、本業を持ちながら音楽活動をする人がほとんどでした。
元々彼には音楽の才能があり、ピアノ演奏に関しても近所で
評判になるくらいの腕前でしたが、音楽家になった時の収入
面を考えた両親の方針で法律学校へ進学します。軍隊のよう
に厳しい学校を卒業し、後に法務省へ就職。農民の書類下書
きを作成するなど、庶民との距離が近い仕事をしていました。

一時仕事への熱意が下がりがサボりがちになってはいたもの
の、ある日態度を改めて真面目に勤めてからは、初年度に係
長下級助手、翌年上級助手、2年後には成績を上げ八等文官
から七等文官へとすごい速さで昇進します。同僚や上司から
は性格と印象の良さや品位が評価されていました。法務省に
身を置くことで音楽漬けの日々ではなく、自然と庶民的な農
民が歌うロシアやウクライナの民謡に囲まれて生活していた
のです。

彼の勤務後の何よりの楽しみはお洒落な格好をしてパー
ティでピアノを弾くことで、一度メロディーを聴くと演奏で
再現出来る能力が仲間からも重宝がられました。しかし毎晩
のように出かけていく彼を心配した父は、そんなに音楽が好
きなら「今からでも音楽家になるのは遅くないのではない
か？」と音楽の道を提案します。はじめは「パパが音楽家にな
るのにまだ遅くないと言う。仮にそうだとしよう。しかし、問
題は僕に才能があったとしても、多分、それを伸ばすのは今
更不可能だ。僕は既に役人になってしまった。もっともあま
り立派ではないけれど」と自信なさげに躊躇していましたが、
日に日に増していく音楽への情熱や思いから、今まで築き上

げてきたキャリアを捨てて本格的に音楽の勉強をすることに
しました。

無事にサンクト・ペテルブルク音楽院に入学し、第一期生
として音楽界の重鎮達から教を請い努力しました。けれど
も、そう簡単に良い点数はつきません。法務省時代、諦めず
真面目に取り組めば評価されていくことを知っていた彼は、
厳しい授業の中西欧音楽の伝統や形式を学びメキメキ実力
を付け、音楽院を卒業します。卒業後はオペラやバレエ、交響
曲など少しずつ丁寧に発表していきました。ロシア民謡が滲
み出てくるような彼の作品は大衆には喜ばれましたが音楽新
聞などでは酷評が続きます。しかし年齢を重ねるに連れ楽曲
を良く思ってくれる人も次第に増えていきました。賛否両論
されつつも人気曲を数多く生み出したことから、少しずつ名
声が高まります。そして晩年にはニューヨーク、カーネギー
ホールの記念すべき第1回目コンサートで、ゲストとして呼
ばれ作品を演奏されるようになる程、国内外で評価されるよ
うになりました。

サンクトペテルブルク音楽院で学んだ西欧音楽の伝統的な
形式に、法務省時代までに馴染み深かった民謡を取り入れた
ことで彼の作品は人々の心をガッチリ掴んだのです。ロシア・
ウクライナ民謡はチャイコフスキーの親しみやすい作品の隠
し味となっているのではないのでしょうか。

📌 おすすめの一曲

チャイコフスキー / ピアノ協奏曲第1番 変ロ短調 Op.23

彼が34歳の時に作曲したこの曲は親友に献呈するつ
もりでしたが、西欧音楽の決まりを重視する友は「こん
な曲は無価値で手直しも出来ない。下品で演奏不可能だ」
と心無い言葉で酷評しました。しかし、ハンス・フォン・
ビューローという当時有名だったピアニストがこの曲を
とても好み、演奏ツアーの際にレパートリーとして取り
入れてから今では世界中で人気曲となったのです。
第一楽章ではウクライナの吟遊詩人が歌う通俗的な民謡
がメインテーマになっていて、第三楽章にウクライナ民
謡「出ておいで、出ておいで、イヴァンカ」が取り入れら
れています。『Tchaikovsky Piano Concert 1』で検索す
るといくつかの音源が見つかるので是非聞いてみてくだ
さいね。



ブラームスの隠し味 (前編) 「厳しいレッスン」



Brahms, Johannes

ブラームスはドイツで活躍した作曲家です。「ドイツの 3B」として、同じ頭文字「B」のバッハやベートーヴェンと並んで讃えられていますが、実は彼が活動していた 19 世紀後半、作曲家は気軽に曲を書けないことが大きな悩みでした。なぜなら、新作を書いてもベートーヴェンと比較され、批評家にポロポロに言われてしまうことが目に見えていたからです。そこでブラームスは、過去の作品を徹底的に研究し、論理的なスタイルで作曲をすることにより評価を得ていきました。試行錯誤が繰り返された奥深い楽曲は、今も愛され続けています。今回はそんなブラームスの「厳しいレッスン」が隠し味です。彼の弟子とのやり取りを通じて、作品へのこだわりを見てみましょう。

当時、作曲家は作品を書くだけでなく、次世代に繋がる弟子をとり、その受講料で生計を立てる事が普通でした。しかしブラームスは、作曲で十分なギャラを貰えており、自身の音楽活動に専念したいという考えから、弟子を取りたがりませんでした。

そんな中でたった 1 人だけ、弟子になる事が出来たイェンナーという青年がいます。作曲家を志していたイェンナーは「是非自分の作品への感想をいただきたい」と、当時から評判だった偉大なるブラームスに会いに行きました。元々彼の作品を見たことがあり好感を持っていたブラームスは、快くレッスンを引き受けます。

そうして始まったレッスン初日、ブラームスは既にイェンナーの作品をくまなくチェックしていました。弟子は、師匠のどんな曲でも真摯に受け止める姿勢に感銘を受けたといいます。それから、事前に細かく調べていない作品を教えられる事は一度もなかったそうです。レッスンは非情なまでに厳しく、弟子は何度も目に涙を浮かべました。それでも青年は師匠について行きたいと切磋琢磨します。どんなに厳しい事を言われても、皮肉や意地悪な事は無く、全て善意からくる言葉だと分かっていたからです。

前述の通り、ブラームスは音楽を論理的に作るということ徹底しました。土台が不安定だと、どんなに綺麗なメロディーでも魅力的にならないからです。彼は弟子が作ってきた曲を見ては「論理的に」間違いを指摘し、なぜ間違えているのか理由も必ず一緒に教えました。ただ、その指導は非常に辛く、日を増すごとに険しさも増していきます。ある時は、イェンナーが自信を持って提出した曲に対して「いいところなど何もない」と言い放つことがありました。またある時は、一度ダメ出しされた曲に手直しをしたものが再提出したことに対して「新しい曲を持ってこい」と不機嫌になったこともありました。ブラームスは「一度完成してしまった曲を手直しして良くなる事は稀で、大抵は悪くなる。毎日新しい曲を生み出し続けることが『仕事』なのだ。」と言っており、「ペンは書くためではなく、消すためにある。」と繰り返していたといいます。

ブラームス自身も、曲の中で辻褃が合わない点があることや、曲の終わりがこじつけようになってしまうことを少しも許しませんでした。自身の作品が何曲燃やされたのか分からない程、書いては消す事を繰り返したのです。彼はいくつもの失敗を乗り越え、膨大な時間をかけて名曲を生み出していました。

だからこそ、彼の作品の構成力と奥深さは今でも色褪せることがありません。ブラームスの「厳しいレッスン」は作品の隠し味となっているのではないのでしょうか。

おすすめの一曲

ブラームス / 交響曲第 2 番

巨匠ベートーヴェンが亡くなってから、音楽界隈では「これから良い交響曲なんて生まれるのだろうか？」と絶望を感じていました。名だたる作曲家も交響曲（オーケストラで演奏される大規模で長大な曲）というジャンルだけは避けるようになっていたのです。そんな中で、生涯諦めずにこのジャンルに取り組み続けたのがブラームスです。彼が最初の「交響曲」を発表するまでに、なんと 40 年もかかっています。

交響曲第 2 番は、明るい趣で当時の人々の心を掴みました。初演は大成功。拍手喝采が鳴り止まなかったそうです。全楽章聴くと 40 分位かかるので、まずは作業用として少し軽やかな気持ちで聴くと楽しめるのではないかと思います。何度聴いても論理的で奥深く、もっとこの曲を知りたいと思えるような作品です。『Brahms Symphony 2』で検索するといくつかの音源が見つかるので是非聴いてみてくださいね。



ブラームスの隠し味 (後編) 「古い音楽」



Brahms, Johannes

ブラームスは、「ベートーヴェンの後継者」と評価されました。ベートーヴェンが崇められていた時代に「後継者」と呼ばれる事は、同世代の作曲家にとって羨望の眼差しが向けられるような名譽です。

今回はそんなブラームスが常に意識をしていた「古い音楽」が隠し味です。

ブラームスは古い音楽に人一倍関心を持っていました。彼はとにかく勤勉家で、ありとあらゆる時代の楽譜を入手し、研究を繰り返します。自宅には約 2000 冊もの楽譜があったそうです。古い音楽は、ブラームスの作品へどのような影響を与えたのでしょうか。

一世代ほど前、彼と同じ土地ウィーンで活躍した作曲家は、ベートーヴェンです。ベートーヴェンは、これまでの時代における音楽の集大成といえる素晴らしい楽曲の数々を残しました。非の打ち所がない作品に一番困ったのは後世の作曲家です。新しい交響曲、ピアノ曲、室内楽曲、何を作ってもベートーヴェンは越えられない壁として大きく立ちはだかりました。ブラームスも例外ではありません。「ベートーヴェンという巨人が背後から行進してくるのをきくと、なかなか交響曲を書く気にはならない」と苦戦しました。それによって一曲の品質にこだわり、最初の交響曲を書くのに考案から完成まで 21 年もかかっています。やっと出来上がった交響曲第 1 番 Op.68 は、「ベートーヴェンの新しい交響曲」と、多くの人に愛されています。

彼と同じく、ベートーヴェンを尊敬していたのは、シューベルトです。シューベルトは巨匠の葬儀に足を運び、「一体誰にもっと良い作品が書けるといえるのだろうか?」と、彼もベートーヴェンが作り上げた壁の高さに悩みました。しかし、晩年にはベートーヴェンに続く名曲の数々を生み出します。そして、これまで軽い音楽と見られていた「歌曲」というジャンルの底上げに成功しました。

ブラームスは、作曲のレッスンにて生徒に「シューベルトの歌曲の中で、人が学べないような歌曲は一曲たりともない。」と話していたそうです。そしてシューベルトがお気に入りだったレストラン「赤いはりねずみ」に毎日通うくらい、尊敬と憧れを持っていました。彼の作品には、シューベルト歌曲の特徴“ベースライン”の美しさが活かされています。

ブラームスにとっては“民謡”も古い音楽のひとつです。彼はドイツ民謡を片っ端から調べました。民謡のリズム、メロディの作り方など、音楽的な部分が作曲の中で多用されています。民謡の歌詞やメロディをそのまま採用して創作した曲もあるくらいです。地域に根付いた音楽を使うことで、人間的な愛情や自然の豊かさを表現しているのです。

当時の音楽的な流行は、曲の中で速度が大きく変化したり、複雑な和音を使うことだった為「時代遅れ」と言われる事もありました。しかし、ブラームスは断固、古い作曲スタイルを守り抜きます。なぜなら彼は、昔からある作曲法を使って一歩先に進んだ作品を目指していたからです。

ブラームス作品の魅力は、古典的な作曲技法の中にモダンな一面がある所にあります。ベートーヴェンから高い壁を目指す意識、シューベルトから美しいベースラインなど曲の構成、民謡から地域に根付いた独特なメロディを学んだからこそ出来る事なのです。「古い音楽」はブラームス作品の隠し味となっているのではないのでしょうか。

おすすめの一曲

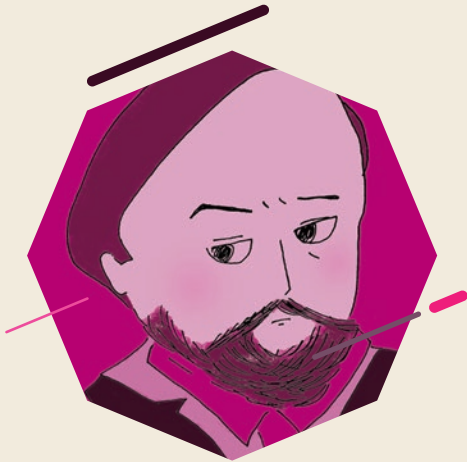
ブラームス / ピアノソナタ第 1 番 Op.1

ブラームスの生きた 19 世紀では、批評雑誌が出版され、有名音楽家が若手を評価しました。この曲は、その雑誌で「ベートーヴェンの後継者」として取り上げられて注目が集まった、いわゆるデビュー作です。

この曲の第一楽章にて、ベートーヴェンのピアノソナタ第 29 番『ハンマークラヴィーア・ソナタ』第一楽章冒頭のリズムとメロディを用いてる事、ベートーヴェンと同じく曲が精密に作り込まれている、という点から「後継者」と書かれたのでしょう。『brahms piano sonata 1』で検索するといくつかの音源が見つかるので是非聴いてみてくださいね。



ドビュッシーの隠し味 (前編) 「コンクール歴」



Debussy, Claude Achille

ドビュッシーは、19～20 世紀にかけて活躍したフランスの作曲家です。彼はこれまでに使われていた西洋音楽のルールに疑問を持ち、独自の表現を編み出しました。作品の楽譜表紙に葛飾北斎の浮世絵を使用した事から、日本でも特に愛されている作曲家のうちの 1 人です。また、1980 年には 20 フラン紙幣に彼の肖像が印刷されるなど、フランスといえばドビュッシーと言っても過言では無い程代表的文化人です。皮肉屋で内気、決して良いとは言えない性格は、何十年経ってもつい吸い込まれてしまうような魅力に溢れているのです。

彼の楽曲はクラシック音楽の中でも特に異彩を放っています。「全音階」という、その時代までにはあまり使用されていなかった作曲方法を使っているからです。今でこそ高い評価を受けていますが当時はなかなか理解されることはありませんでした。今回の音楽の隠し味は、ドビュッシーの「コンクール歴」です。

ドビュッシーは 8 才からピアノを始めました。ピアニストになるには少し遅いと言われている年齢ですが、メキメキ上達してたった 1 年間で音楽院のピアノ試験が受けられる程の腕前になります。はじめはピアニストを志しますが、その後 7 年間良い成績を取めることは出来ませんでした。

そこでピアノに見切りをつけ、彼は作曲家を志す事にします。彼が曲を作る上で一番大切に考えたのは「自分の耳」です。クラシック音楽には様々なルールや形式があり、これまでの作曲家は模範的でミスが少ない作曲をする事が大前提にありました。稀に遊び心としてルールを守らない事はあっても、骨組みは守っていないと評価されにくい時代だったのです。

しかしドビュッシーは、あえてミスを連発します。当然学内での評価は悪く、「どうしてこのような事をするのか。この音を君は美しいと本当に思うのか?」という師の問いに対し、「ええ、きれいだと思えますとも!」と言いました。彼にとって理論なんてものは無く、聴いて快いということが一番のルールだったのです。

さて、当時のフランスで正統派の作曲家になるには、必ず通らなければならないと言われている狭き門があります。「ローマ賞」です。パリ音楽院作曲科の内部的に行われるコンクールで、時間内に課題をこなし審査員に認められれば、ローマ賞授与の栄誉とイタリアへ最大 4 年間の留学が与えられるものでした。

コンクールはかなり過酷なもので、予選をクリアした通過者は、狭く薄暗い屋根裏部屋に押し込められます。そして、25 日間ひたすら作曲に打ち込むのです。受験者が集中したい時に限って、向かいの教会では結婚式が行われ大音量で音楽が流れてくる始末。結婚式中の新郎新婦に向かって、屋根裏部屋の予選通過者達はワー!ギャオー!と奇声を発するくらい厳しい戦いでした。

ドビュッシーはこのコンクールに 3 回出場します。1 回目は予選落ち、2 回目で本選二等賞、3 回目でやっとローマ賞を受賞します。

せっかく受賞した作品ですが、彼自身は気に入っていませんでした。何故なら審査員受けする様に自分の耳を頼りにするというルールを曲げ、型へはめ込むよう妥協したからです。後に彼は「コンクールは絶対に有害なものだ。何の賞を取らずとも完璧な音楽家になっている人もいる。」と話しています。しかし、彼のコンクール受賞歴が仕事に影響したことも事実でその後は目覚ましい活躍をみせました。

ドビュッシーはローマ賞を獲った事により、作曲をする上での " 正解 " を書けるという事を証明しました。しかし、彼は創作の上で " 正解 " を書きたがりませんでした。既存のルールよりも耳で聞いた美しさを優先させたかったからです。

適当に自分の耳だけで創作している事と、答えを知っている理論も分かった上で音の選択をしている事では大きく違います。理論を知った上で敢えて崩しているからこそ彼の作品は素晴らしく美しく、独特な曲ばかりなのです。

ドビュッシーの「コンクール歴」は作品の隠し味となっているのではないのでしょうか。

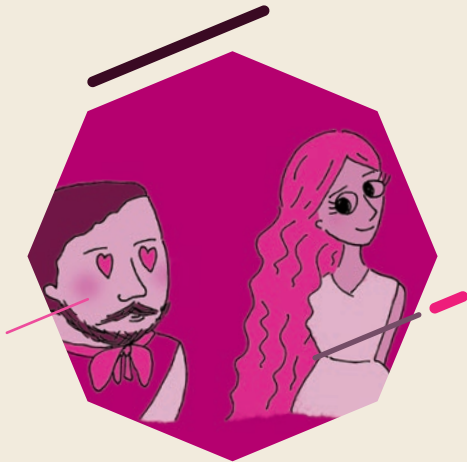
🎵 おすすめの一曲

ドビュッシー / 牧神の午後への前奏曲

この曲はマラルメという詩人の「牧神の午後」という詩に寄せて書かれました。牧神とは山野と牧畜を司る半人半獣の神のことで、その神が眠りから覚めたところから始まります。夢なのか現実なのか行ったり来たりする様子が見事に音楽によって描かれていて、思わずため息をついてしまう程美しい作品です。『debussyfaune』で検索するといくつかの音源が見つかるので是非聴いてみてくださいね。



ドビュッシーの隠し味 (後編) 「ペレアスとメリザンド」



Debussy and Melisande

ドビュッシーの有名な曲といえば、「月の光」などピアノ作品が多いのですが、実はオペラ作品も残っています。彼のオペラへのこだわりはとても強く、完璧なものを常に求めていました。だからこそその未完成作品も数多く、その中には自ら台本を脚色するくらい熱量を持った作品もあります。

今回の音楽の隠し味は、ドビュッシーのたった 1 つのオペラ「ペレアスとメリザンド」です。

このオペラは上演回数が少なく、なかなか観る機会が得られないので、この場でざっとあらすじをお話します。

時代は中世ヨーロッパ、架空のアルモンド王国。泉のほとりで泣くミステリアスで長い髪の美女「メリザンド」に一目惚れした王太子「ゴロー」は、メリザンドを連れ帰り結婚します。ゴローが暗い城で、メリザンドに彼の弟「ペレアス」を紹介することが全てのはじまりなのです。若い弟ペレアスとメリザンドはすぐに打ち解けて仲良くなり、泉で戯れあっていると、誤って婚約指輪を落としてしまいます。その事に気づいたゴローは夜も更けているのに「探してこい！」と大激怒しました。

場面は変わり、塔の上で。メリザンドは自分の背丈より長い髪を塔から垂らし、歌を歌っています。たまたま通りがかったペレアスは、彼女の髪をみてなんと美しい!と狂喜乱舞。しかし塔に髪が絡まってしまい、そうこうしているうちにゴローに見つかります。ゴローは嫉妬心が渦巻いて、メリザンドをなじり、髪を引きずりまわしました。もうメリザンドはゴローを愛することは出来ず、ペレアスの愛の告白を受け両想いに。その束の間に、陰から見ていたゴローは剣を抜きペレアスを刺してしまいます。ゴローが後悔している中、メリザンドは悲しみの末息を引き取るのでした。

と、なかなかハードなストーリーですね。音楽的な部分に関しては、各登場人物や場所（泉、森など）にはそれぞれを表すテーマとなるメロディが付けられています。

ゴローの嫉妬心が燃えるシーンでは、ペレアスとメリザンドのテーマの裏側にゴローのテーマが執拗に繰り返され、劇と音楽が一致するように作られているのです。各登場人物のテーマが際立つよう全体的にオーケストラの音量を下けているのも作曲家のこだわりの一つです。

このオペラの配役を決める時、劇の台本作家が、メリザンド役に是非自分の愛人を立てて欲しいとドビュッシーに要請しました。しかしドビュッシーは、作家の愛人があまり歌が上手くなく、少し太めだった所が気に入り承諾出来ません。台本作家は大激怒。著作権訴訟を起こしますが作家側が敗れ、ドビュッシーを杖で殴るという事件が勃発しました。

公演前のゲネプロでは台本作家をはじめ、わざわざ彼を良く思っていない文化人が集いました。第二幕第二場最後、メリザンド役が「私は幸せではありません」という大事な部分で、英語訛りの発音がおかしいと笑いが起こります。ミスを待ち構えていた文化人達は、全部おしまいだね!成功なんてないさ!と口々に悪口を言いました。

しかしドビュッシーと役者達は、通し稽古を異例の 21 回も重ねた事で作品に自信を持っていた為、公演初日は堂々とした演技で観客を魅了します。当時耳馴染みがなかったドビュッシーの独特な和音の響きに、はじめはシーンとした劇場でしたが、徐々におずおずとした拍手が湧き上がり、最後には大成功を収めました。

おすすめの一曲

ドビュッシー / 前奏曲集 第 1 集 亜麻色の髪の乙女

この曲は、ルコント・ド・リルの詩からインスピレーションを受け作曲されたものです。ドビュッシーは、女性の髪に対して人一倍興味を持っていました。ある日、彼がピアノレッスンをしている際、生徒の長い髪があまりにも美しく全く生徒のピアノを聴いていなかったというエピソードがあります。また、オペラ「ペレアスとメリザンド」のメリザンドも、塔から髪を垂らす程長い髪を持ち主です。他にも髪に関する曲は多々ありますが、ゆったりと優しく流れるこの作品は、彼の理想とする美しい髪を表現しているかのようです。『debussy la fille』で検索するといくつかの音源が見つかるので是非聴いてみてくださいね。

あとがき

本書を執筆するにあたって、8名の偉大な作曲家の人生と向き合いました。彼らの伝記を読むと、執筆者の意見や感想を交えて曖昧にしている部分が多く見受けられます。時と共に新しい説に塗り替えられる可能性があるからです。それだけ作曲家の人生は不明な所があり、今後解明されるかもしれないということですが、本書では筆者の意見は抑え、史実や現段階の研究結果を言い切ることが出来る話に限定しました。なるべく古い文献と新しい文献を満遍なく読み、新しい説が出ていないか入念に調べています。

そして万人に分かりやすく伝えられるよう、音楽用語など専門的な言葉は取り除きました。転調やソナタ形式、古典派ロマン派、教会旋法などをどのように言い換えるのかが、最も難航した所です。この本に書かれている事は作曲家の生涯のほんの一部、全体的な流れよりも読みやすさを重視し、敢えて1つの話に絞っています。波乱万丈で笑いあり涙あり、そして素晴らしい作品を生み出した作曲家の人生は深く、調べる度に面白いエピソードが幾つも見つかりました。全てを盛り込みたい気持ちを落ち着かせ、「隠し味」として相応しい話のみにスポットライトを当てています。

才能溢れる作曲家の一生を学ぶ事で得られたものは、数え切れない程多くありました。同じ時代を過ごしてみただけで、と思うくらい魅力的な作曲家ばかりです。時代や国が違っても、音楽に対する考え方や性格、恋愛観に共感することさえありました。楽譜を読むだけでは彼らを取り巻く当時の人間関係や歴史的背景は分かりません。どんな人が曲を作ったのか勉強することは、ピアノを演奏する上でも大きく役立っています。

クラシック音楽は、一般的にはあまり馴染みがないかもしれませんが、一度足を踏み入れてみると息を飲むような美しい世界が広がっています。「音楽の隠し味」が、クラシック音楽 " はじめの一歩 " の手助けとなりますように。

2020年 白川優希

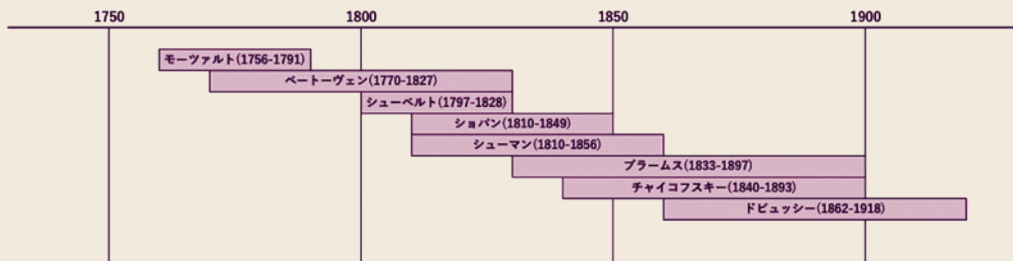
作曲家年譜

1750 1800 1850 1900

モーツァルト(1756-1791)

ベートーヴェン(1770-1827)

作曲家年譜



主要参考文献 [伝記・書簡]

井上太郎『決定版 モーツァルトのいる部屋』河出書房新社(2014年初版)
海老澤敏『新・モーツァルト考』日本放送協会(1987年初版)
小宮正安『コンスタンツェ・モーツァルト』講談社選書メチエ(2017年初版)
西川尚生『作曲家◎人と作品 モーツァルト』音楽之友社(2005年初版、2016年第11刷)

青木やよひ『ベートーヴェンの生涯』平凡社(2018年出版、初版第1刷)
作曲家別名曲解説ライブラリー『ベートーヴェン』音楽之友社(1992年初版)
ジョン・オシエ著/菅野弘久訳『音楽と病』法政大学出版局(1996年初版、2017年改装版第1刷)
中村洋子『クラシックの真実は大作作曲家の「自筆譜」にあり!』DU BOOKS(2016年3月1日初版、同年5月1日第2刷)
西原稔『音楽史ほんとうの話』音楽之友社(2005年出版、2006年第2刷)
平野昭『ベートーヴェン』新潮文庫(1985年出版、第1刷)
平野昭『ベートーヴェン』音楽之友社(2012年出版、2018年第4刷)
ロマン・ロラン『ベートーヴェンの生涯』岩波書店(1938年出版、2013年第81刷)
山根銀二『ベートーヴェンの生涯』岩波書店(1979年出版、第1刷)

O.E. ドイツチュ編/實吉晴夫訳『シューベルトの手紙』メタモル出版(2004年初版)
作曲家別名曲解説ライブラリー『シューベルト』音楽之友社(1994年初版)
藤田晴子『シューベルト 生涯と作品』音楽之友社(2002年初版)
村田千尋『作曲家◎人と作品 シューベルト』音楽之友社(2004年初版)

アーサー・ヘドレイ編 小松雄一郎訳『ショパンの手紙』白水社(1965年初版)
伊熊よし子『図説ショパン』河出書房新社(2010年初版)
萩谷由喜子『ショパンをめぐる女性たち』株式会社ショパン(2010年初版)
小坂裕子『ショパン』音楽之友社(2018年初版)
大内田優文『ショパンとサンド ゆかりの地を訪ねる』株式会社スタイルノート(2011年初版、2013年第2刷)
エヴェレット・ヘルム著/許光俊訳『<大作作曲家>チャイコフスキー』音楽之友社(1993年初版)
小松祐子『チャイコフスキー伝上・下巻』文芸社(2017年初版)
作曲家別名曲解説ライブラリー『チャイコフスキー』音楽之友社(2007年初版)
森田稔『ロシア音楽の魅力』東洋書店(2008年初版)

ウォルター・フリッシュ/天崎浩二訳『ブラームス4つの交響曲』音楽之友社(1999年初版)
門馬直美『ブラームス』春秋社(1999年初版) 作曲家別名曲解説ライブラリー
『ブラームス』日本ブラームス協会『ブラームスの「実像」』音楽之友社(1997年初版) 音楽之友社(1993年初版)
渡辺茂『ブラームス』芸術現代社(1995年初版)

青柳いづみこ『ドビュッシー=想念のエクストラブルム』東京書籍株式会社(1997年初版)
青柳いづみこ『ドビュッシーとの散歩』中央公論新社(2016年初版)
青柳いづみこ『ドビュッシー最後の一年』中央公論新社(2018年初版)
岡田暁生『西洋音楽史』中公新書(2005年初版、2006年第8刷)
作曲家別名曲解説ライブラリー『ドビュッシー』音楽之友社(1993年初版)
ドビュッシー/平島正郎訳『音楽論集』岩波書店(1996年初版)
松橋麻利『作曲家◎人と作品 ドビュッシー』音楽之友社(2007年初版、2016年第7刷)
堀内修・石戸谷結子編『オペラ・ハンドブック』三省堂(1999年初版)
メーテルランク/杉本秀太郎訳『対訳ベレアスとメリザンド』岩波書店(1988初版)

*掲載元/戸塚区民文化センター発行 情報誌『SAKURA』にて掲載中の連載「音楽の隠し味」Vol.36~45より

協力/戸塚区民文化センターさくらプラザ/H.P.Music
装丁・デザイン/伊藤仁美
イラスト/白川優希

音楽の隠し味

2020年10月 第一刷発行 著者 白川優希

この著作物の全部または一部を権利者に無断で複製(コピー)することは、
著作権の侵害にあたり、著作権法により罰せられます。

Printed in Japan

2020 by Yuki SHIRAKAWA



「音楽の隠し味」